淀川沿い「伝法」街歩き

図書館の帰り、21 日にレポートした此花区の伝法を訪ねた。駅から淀川の堤防沿いを歩いたが、寒風が吹きつけて冷たかった。対岸は西淀川区の工場地帯で、先の方に矢倉緑地が見える。すこし行くと水門があった。高潮対策として 1964 年完成という。大阪市漁業協同組合あたりから堤防を降り、漁港の横を歩いた。たくさんの船が係留されていた。21 日レポートで紹介した「とことん調査隊」によると、伝法港で水揚げされるのは、ウナギやシジミ、ススキなど。なかでも淀川で採れるウナギは味がさっぱりしていて、おいしいと評判という。いちど食べたいものだ。

寒いので、足早に次の目的地に向かった。伝法は仏教伝来の上陸地との説もあり、街中に多くの寺があった。804 年に創建されたという澪標（みおつくし）住吉神社に行った。大阪市章の澪標に興味があったからだ。案内には次のように書かれていた。

「澪標」は、澪の串という意味で、航行する船に、通りやすい深い水脈を知らせるため、千年以上の昔に初めて難波（大阪）に建てられました。明治 27 年大阪市会では、商業都府の根本は港で、船に基づくとの理由から、市章を澪標と決定しました。

伝法は、江戸時代、樽廻船の起こった土地で、古くから水上交通が盛んでした。当神社の南の浜辺にも、大きい澪標が立っていました。「澪標住吉神社」という社名は、人生という航路で心のより所にする神社、との思いをこめて名づけられたのでしょう。

古歌では、「身を尽くし」にかけて歌われてきました。

難波がた　何にもあらず　身をつくし
ふかきこころの　しるしばかりぞ

（後撰集　950 年頃）

澪標は、岡山県の倉敷川には今も数多く残っています。

万葉集にうたわれた奥浜名湖の細江町は、模型を建てて歴史をとどめ、町章も澪標を図案化したものです。

寒風吹きつけるなか、こうして伝法を駆け足で街歩きしてみると、多くの「発見」があった。昨年の大阪市廃止の是非を問う住民投票で、澪標の垂れ幕やチラシがあった。それだけ大阪市民に歴史と愛着を感じさせるものなのだろう。

澪標のように、大阪市の発展のために身をつくしたい。

（2021 年 11 月 24 日）